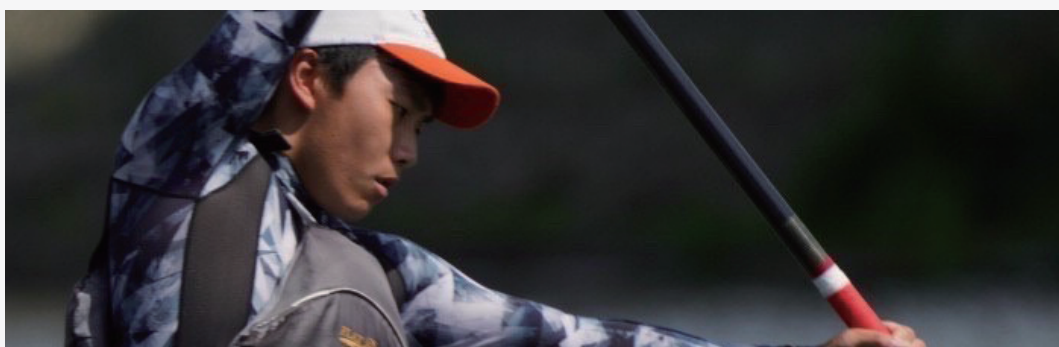


Close-Up それぞれの夢舞台



この夏、全国大会の舞台で活躍した高校生の皆さんを紹介します。大会に向けて頑張ってきた選手たちの、競技への思いを聞きました。





1_男子カナディアンに出場した大洲高校カヌー部の皆さん。選手は左右どちらか片側のみをこぐのが特徴。笑顔で手を振る長渕さん(写真右) 2_息を合わせて漕ぎ出す4選手 3_小麦色に焼けた肌で艇を運ぶ 4_片膝立ちでバランスを取るために、さまざまなテクニックが必要 5_入賞メンバーで記念撮影(写真提供:本人)

全国大会に出場する皆さんを応援しています

内子町では全国大会や国際大会に出場する皆さんに応援金などを交付しています。事前に申請手続きが必要ですので、出場が決まったらご連絡ください。

《内子町がんばる子ども応援金》

●対象者または団体

▷個人 町内に住む小学生・中学生・高校生

▷団体 町内の小学校・中学校・高等学校に所属する団体

●応援金の額

▷全国大会 個人1万円、団体10万円以内

▷国際大会 個人3万円、団体30万円以内

《内子町スポーツ大会出場激励金》

●対象者 町内に住む人(高校生以下を除く)

●激励金の額

▷全国大会 1万円

▷国際大会 3万円

《共通事項》

●対象の大会 国などが主催または共催する全国規模の大会で、予選を経て出場するもの

ID131707

【申込・問い合わせ】

内子町教育委員会 自治・学習課 生涯学習係(内子分庁内)

☎0893(44)2114



カヌー競技/全国高等学校総合体育大会

自分たちの力を信じて 勝ち取った6位入賞

膝立ちでこぐカナディアンは、座った姿勢のカヤックよりもバランスを取るのが難しい競技です。カナディアンを選んだのは、「膝立ちのほうが格好いいから」——。バランスを少し崩しただけでもタイムに大きく影響します。自分は4人でこぐ「フォア」の最後尾を担当しています。他の3人と合わせながら、曲がったら微調整をする大切なポジションです。腕だけでなく全身をうまく使うことや体重のかけ方などを、何度も練習を重ねて一つずつ身に付けてきました。バランスを保ちながらいかに艇を真つすぐ進ませるかが難しく、面白いです。

全国大会への出場は昨年に続



長渕 一真さん

(大洲高3年)＝富中＝

いて2回目です。2年生で出場した前回は艇のコントロールミスをしてしまいました。他のチームにもミスがありギリギリの8位入賞でした。今年こそは自分たちの力を出し切ろうと、4人で息を合わせることをずっと意識して練習してきました。周りにはみんな体の大きな選手ばかり。レースではスタートで少し遅れて焦りましたが、自分たちの力を信じて、一番きついラスト50メートルまで力を出し切ることができました。普段から意識してきたことが結果につながり、自分にとっては最後の大会で、自分たちの力で勝ち取った6位をとてもうれしく思います。カヌー部が続けてきた全国での連続入賞を、後輩たちが受け継いでくれたらうれしいです。



内子高校ライフル射撃部の皆さん。全国高等学校ライフル射撃競技選手権大会の出場種目と選手は「学校対抗戦チーム・ライフル（以下、BR）男子／安川・畠岡・久保」「BR少年男子立射40発／安川・星加・畠岡・久保」「BR少年女子立射40発／山岡」



全国高等学校ライフル射撃選手権大会
全日本高校生ピストル射撃競技選手権大会



山岡 和奏さん
（内子高3年）＝大洲市＝

気持ちが大切な競技
楽しみながら臨んでほしい

篠浦さんに誘われてライフル射撃を始めました。最初は意外とうまくできたけれど、2年生の時にスランプに。全然点が出なくてつらい時期が続きました。3年生になって後輩に教える立場になり、自分が基本を忘れていることに気がきました。足の広げ方やトリガーを引くタイミングなど、一つ一つ後輩に教えながら自分を振り返っているとまた点数が伸びてきました。一つのことに集中しなくても他がうまくいかないのが難しいです。後輩の手本になるようにと臨んだ全国大会でしたが、目標の620点を出すことができず悔しさが残ります。気持ちがすごく影響する競技で、部員には「点が出なかったらどうしよう」と不安そうにする子もいました。後輩たちにはこれからの大会に楽しく臨んでほしいです。そのほうがきっといい結果につながるはずです。



篠浦 優奈さん
（内子高3年）＝大洲市＝

自分の射撃を追い求めて
高め合った仲間たち

全国大会ではチームで唯一、ピストル射撃競技に出場しました。40分間で60発を撃ち切るため、集中を切らさないことが大切な競技です。以前は一発一発点数を確認して、10点以下が出たら焦って点数を落としてしまうことも――。今回は着弾点だけを見て、気付いたら60発撃ち終わっていたというくらい、いい集中力で臨めたと思います。ライフル射撃競技の団体戦ではマネージャーとして選手をサポートしました。部員はそれぞれ課題を持って自分の射撃を追い求めてきました。癖がつい出てしまうので、試合中も周りから気付いたことを伝えるようにしています。考え方も性格もいろいろな部員同士で支え合いながら日々練習してきたことが本番でも出せたし、次につながる大会になったと思います。内子高校の恵まれた環境で、後輩たちにこれからも頑張ってもらいたい。

松山将棋センターで撮影。同センターは小学生から大人まで、気軽に立ち寄って対局を楽しむことができる。松浦さんは居合わせた小学生と対戦したり、戦術などを語り合ったりする場面も見られた。松浦さんが中学生の頃には、センターで共にプロを目指した仲間と研究の成果を披露しあっていた。長いときは朝10時から夜8時までいたこともあるという。



高校の新人戦や高文祭、一般の大会などを合わせると、全国大会は8回目の出場になりました。将棋を通じて全国に知り合いもできました。東京の将棋カフェに集まったり、ネット将棋を指したりしてプライベートでも交流する友人もいます。愛媛に来てくれた時は、僕が小学生の頃から通っている松山将棋セ

ンターに誘って対局することもあります。話を聞いていると、強い人は自分よりもたくさん将棋の手を研究していることが分かります。自分はそこまで時間をかけてこなかったけれど、彼らに影響を受けて、より将棋に真剣に取り組むようになりました。一度負けた相手には絶対に負けたくないので、どう戦えばいいかAIソフトなどを使いながら作戦を考えます。自分より強い人に勝てる楽しさ、戦うこと自体がモチベーションになっています。

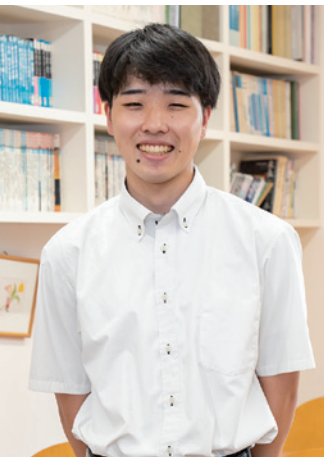
将棋／全国高等学校総合文化祭



全国の将棋仲間の存在が
強くなる原動力に

全国大会では3人チームの団体戦に副将として出場しました。予選の4局中3勝して決勝進出が決まったところで、4戦目に去年の優勝校と対戦。とても強く、自分の未知の局面になったときの手の選び方に差が出て、全国レベルの経験値の高さを感じました。

将棋は何手も先を読む奥深さが魅力でやめられません。大学でも将棋を続けたいです。全国で上位に行くことを目標に、これからも努力したいです。



松浦 玄武さん
（済美高3年）＝内子13＝



1_姉妹で全国大会に出場した、大木心琴さん(右)と、妹の沙彩さん。学校では先輩と後輩の関係ですが、家に帰ると「練習中には話せない愚痴なども、お互いたくさん聞いてもらっている」と2人で笑います 2_打席に向かう心琴さん。きれいなバッティングフォームを地道な練習で身に付けた 3_勝利を目指してチームが一つに 4_サードの守備位置で全国の舞台に立った沙彩さん。大舞台でも大きな声を出してムードを盛り上げた(2,3,4写真提供:保護者)

レギュラーとして大舞台に立ちたい

大木 沙彩さん(済美高2年)＝石量7＝

守備が得意でポジションはサードです。普段からキャッチャーのサインやバッターを見ながら守備位置を変えるなど、普段先生に教わったことを意識しながら取り組んでいます。試合には6回裏、2アウト満塁のピンチの場面で守備から途中出場しました。絶対に点を取られてはいけない場面でしたが、思ったほど緊張はしませんでした。待ちわびた出番が来たことがうれしくて、とにかく精一杯プレーすることを考えていました。

相手は18歳以下の日本代表選手もいるチーム。それでも勝てないとは思いませんでした。試合にあまり出られなかったのが、私としては負けた悔しさをそこまで感じられていません。今後はサードのレギュラーになってもっと試合に出場したいです。チーム内の同じポジションの人には絶対に負けられません。監督からは「静かなサードはいらない」と言われているので、大きな声を出してチームを盛り上げて、勝利に導きたいです。

私を成長させてくれた3年間

大木 心琴さん(済美高3年)＝石量7＝

1年生の時に初めて全国大会でベンチ入りしました。その時は出場機会がなく、今回初めて全国のグラウンドに立ちました。初戦の相手は春の選抜大会の優勝チームです。私たちはピッチャーを中心に粘り強く守り、得意のバッティングで打ち勝ってきたチームで、強豪相手にも全然負けていないと感じました。いい当たりが相手の正面を突くなど、なかなか点を奪えず、結局勝てなかったけれど、私たちらしい粘りを見せられたと思います。相手からは「今まで対戦した中で一番しんどい相手だった」と言われていたそうです。

高校では自由参加の朝練を3年間、毎日続けました。素振りを始めるといつまでも集中して続けてしまいます。練習を続けてきたことが本番でうまくできたり、試合で結果を出せたりした時が一番うれしいです。やると決めたことを最後まで続けられたのは自分自身、成長できた部分だと思います。ソフトボールを続けてきてよかったです。



1,2_型を披露してくれた中川さん。技のキレを磨くためには、スピードを上げることときれいに止まることが大切だという。一人での演武でも、まるで本当に相手がいるかのように次々と技を繰り出す 3_勢いが伝わってくる団体演武の様子(写真提供:本人)

悲願の全国初勝利を目指して

柴田 祐輝さん(伊予高3年)＝上立山＝

昨年のインターハイで初めて全国出場しましたが、最終クォーターで失点する悔しい負けでした。今年は1回戦でなんと昨年と同じ相手との対戦。「今度は絶対に負けたくない」と臨みましたが、リベンジは果たせませんでした。それでもチームの目標である丁寧なパスをつなぐことと、最後までボールを追って走り切ることを意識してきました。結果は残念でしたが、自分の力を出し切ったので後悔はありません。

ポジションは右サイドバックで、攻撃も守備もする運動量の多いところなんです。練習でもシャトルランや坂道ダッシュで体力をつけることを意識してきました。サッカーよりも展開が早く、最後まで勝敗が入れ替わるのがホッケーの面白さです。まだ全国大会で勝利したことがないので、四国大会を勝ち抜いて12月の選手権大会で1勝するのが目標です。



ホッケーではスティックを巧みに扱ってボールを運ぶ。柴田さんが守る右サイドから攻撃を仕掛けることがほとんどなので、パスをつないだり前線に攻め込んだりと攻守に重要な役割を果たす。試合終了までボールを追いかけ、全力を出し切った(写真提供:本人)

心身ともに成長させてくれる

中川 豊大さん(松山工業高2年)＝宿茂＝

9つ上の兄の影響で少林寺拳法を高校から始めました。蹴りや突きなどの型の美しさや正確さを競うものです。全国大会には6人で行う団体演武で出場しました。個人技の単独演武と、1対1で寸止めで技を出し合う組み演武を、息を合わせて披露します。目標の予選突破を果たせなかったのが、11月にある県の選抜大会で優勝して、次こそ全国大会の決勝ラウンドに進みたいです。

少林寺拳法をやっていてよかったのは、身体面でも精神面でも成長できたこと。段位が上の先生や全国の選手は動作のキレがすごくて、自分と同じ技なのにすごく迫力や深みがあり、見ていて言葉を失うほどです。自分ももっとうまくなりたくて、心身ともに上を目指して取り組んでいます。練習は基本的な動作の繰り返しです。技にスピードを出すために何度も練習して磨きをかけないといけません。新しい技も覚え、地道に努力してレベルアップしていきたいです。